

ん だいきらい!」とか、涙ナシには見れない。ファンを自称する人から無理矢理おすめされた作品に、通称「きれいなジャイアン」と共に必ず「さようならドラえもん」が入っていたのも思い出す。長い間アニメ放送が続く中でのび太とドラえもんの絆に涙するというのが魅力の一つになったのだろう。ドラえもんといえば、ひみつ道具!というのでもないのだ。藤子・F・不二雄は、どこかで、ドラえもんはSFであるといっていて、それが少し不思議という意味だとわかって笑った記憶もあるのだけれど。いつの日だったか知らないうちに、ドラえもんは、近未来ではなく思い出になっていったようだ。

いや、泣きは、『トイ・ストーリー3』や『ベイマックス』にも見られる。いずれも、子ども時代というものがドラマに欠かせない。『アナと雪の女王』も、子ども時代を封印した大人がそれを解放することで本当の大人になる話だといえないこともない。これは、子どもから大人へという不可逆の変化を前提にしたドラマツルギーとして普通である。他方、『ALWAYS 三丁目の夕日』や『STAND BY ME ドラえもん』は、子ども時代が不可欠だけれど、それに加えて「昭和」という時代への懐旧を特徴としている。このなつかしさこそが売りである。おそらく、なつかしい!という一語は、今日の褒め言葉である。新しい!というのがなぜか褒め言葉だった歴史があるけれど、なつか

しい!という親愛の表明が褒め言葉になったらしい。こういうのを同時代の気分というのだろうか。

むろん、『ALWAYS 三丁目の夕日』三部作への批判もある。スクリーンに映し出された昭和は、昭和じゃない、美化され過ぎているという批判は、わかるけれど、フェアじゃないだろう。これは、エンターテインメントであり、フィクションなのだから。ヤモリだけでなくハエもCGで作画したら写真として正しいというのでもないだろう。

わたしは、西岸良平のコミックス版『三丁目の夕日 夕焼けの詩』が好きな高校生だったので、映画版『ALWAYS 三丁目の夕日』は、別の作品だと思っている。したがって、映画版は、泣けなかったけれど、しかし、泣きの要素を惜しげもなく投入したことに感心した。やあ、やってしまいましたね、よくぞここまで! そうしてフィクションを徹底したことによって『ALWAYS 三丁目の夕日』の世界は、美しかった。この美しさは、絵空事だろう。しかし、絵空事の美を必要とする時がある。その「原風景Ⅱ 幻風景」³によってみずからの醜の現実を思い知る時に。その時、ノスタルジアは、威力を發揮することだろう。

わたしが思うのは、次のことだ。児童文学にとって、ノスタルジアは、一種の禁じ手になっているのではなからうか? 子どもへのそれも、時代へのそれも。アニメの欲望、児童文学の禁欲というコントラストがあるのだろうか。